

今年のゴールデンウィークも帰ってきてくれた。都会で暮らしている子どもたちである。お盆と年末年始も帰ってくるので、年3回は帰省していることになる。年に2回は、子どもの顔を見たほうがよい。そうすれば、子どもの変化に気づくはずである。そんなことが書いてあった本を読んだことがある。逆を言えば、子どもというものは、少なくとも年に2回は、親に顔を見せなさいということになる。これは、真理である。

息子が大学に入った。お盆に帰ってきた。髪の色が変わっていた。都会で就職した。帰ってきた。言葉が変わっていた。だが、中身は変わっていなかった。とりあえず安心する。たぶん、お盆や正月に帰ってきているうちは大丈夫なのである。

以前は、バイクで帰ってきていたこともあった。やめていただきたかった。こちらは心配である。今では新幹線になった。これなら安心である。ラインが届く。「15：31に福島駅に着きます」これだけである。間に合うようにと、福島駅西口へと向かう。新幹線が着いて、降りて、改札を抜けて、西口に来るのに数分はかかる。15：35に着いていれば十分なはずである。頭ではそうわかっているのだが、なぜだか早めに行ってしまう。新幹線が早く着くことなどないのだが。

そうすると、西口に車を止め、人を観察するようになる。人が多い。座っている人がそこら辺にいる。迎えを待っているのだろうか。お父さんらしき人がスーツケースを持ち、息子さんらしき人が隣を歩いている。このお父さんは、改札まで行ったのだろうか。あるいは、ホームまで入ったのかもしれない。そして、新幹線から降りてきた息子の重い荷物を持ってあげる。気持ちはよくわかる。だが、そこまではしない。

人がどんどん出てくる。それぞれお迎えの車へと向かう。気づいたことがある。お盆や年末は、子どもを連れた家族連れが多い。お迎えは、おじいちゃん、おばあちゃんである。お孫さんを見ると、すぐさま相好を崩す。これがよい。ところが、ゴールデンウィークの場合は、家族連れがない。帰ってくるのは若者である。大学生ぐらいの年代に見える。

人がまとまって出てきた。東京からの新幹線が到着したのである。出てくる若者は笑顔である。福島に着いてほっとしたのである。安心したのである。我が家の息子も無事に出てきた。もう慣れた感じである。さすがに、社会人になると外見の変化は見られない。こうやって、毎年恒例の大型連休が始まる。

福島駅の場合は、西口あるいは東口である。駅によっては、これが南口や北口になるのだろう。いずれにせよ、駅の出口は、帰省する者にとって大切な場所になっている。